

倉橋賞を受賞して

利島保

今回の受賞対象となった研究の構想は、ずい分前になる。一九六六年の *Psychological Review* でピアジェとサットン・スミスの遊びの理論に関する論争論文を読んだ時になる。その時、ピアジェの理論は、遊びについて十分な論証を上げず説明原理にすぎない仮説を述べているのではないかと思った。ピアジェの理論は彼のすばらしい洞察の中で生まれてきたものであるから、私のようなものに批判できるわけのものではない。ただ、彼の遊びについての書物を読むたびに、彼の説明は納得できるようにしても、もっと実証的に彼の理論が証明されないかと思いはじめていた。

特に、従来、遊びというものが、魔的な力をもち、それを分析的に見ることが、何かおかしさからざる神域へはいりこむような風潮もあったが、心理学は、無遠慮にもそんな神域へつかづか入り込んでいったのである。ピアジェもその一人である。彼は幼児の遊びを認知発達という側面から取り組んで、遊びのメカニズムの解明を行なったのである。

ピアジェの遊びの認知機能への働きかけについての仮説は、今回の私の研究の中心になっているのは、単にピアジェの理論の検証という意味以外に、幼児の遊びをもっと冷やかにみることによって、遊びの心理学的研究の意義を考えなかったからである。

昨年九月、ニューオーリンズに開かれたアメリカ心理学会で、幼児の遊びについてのシンポジウムが、サットン・スミスとオーガナイザーとして開かれていた。私はそのシンポジウムに出席したが、そこでは遊びの機能の分析に関して、幼児の認知発達とのかわりについての論議がかわされたことが、興味を引いたのである。オーガナイザーのサットン・スミスとは、彼のピアジェとの論争論文を読んで以来の手紙の上での交流があり、昨年夏に私が渡米したおり、コロンビア大学の彼の研究室で数時間、話す機会を作ってくれた。

彼の話によると、アメリカ心理学会が遊びについてのシンポジウムを持ったのは、初めてのことで、今までは、遊びを心理療法

の手段としての意味でしか心理学者の研究対象にならなかったのであるが、彼の今回のシンポジウムは、遊びを心理学の研究対象としてもっと意味のあるものとして広く学会にうたえたいという意図を含んでいるのだと、語ってくれた。

私も彼の話に共感をおぼえた。遊びについての解釈学的、了解学的研究は、今までにも枚挙にいとまがないが、遊びが幼児の精神発達にいかなる意味をもつかを実証的に示してくれた研究がどれほどあったかは、浅学の私にはわからない。ただ、私の目止った客観的研究といわれるものの多くは、観察法を基礎にした生態学的研究であった。確かに、そのような研究は現象記述の上では客観的資料を提供してくれはする。しかし、そこに設定された条件とのかかわりで現われた行動(遊び)についての因果関係は、了解的解釈に満足せざるを得ないのではなからうか。客観的研究はこのような生態学的研究を基礎に、新たに条件コントロールした実験的研究を行って、因果関係をあきらかにする必要があると思う。

今回の受賞研究も、その意味では十分な客観的研究とはいえない。しかし、単なる生態学的研究よりも、仮説に基づいて遊び行動のメカニズムにアプローチしたつもりである。

多分、多くの人は幼児に実験統制をすることに對し、かなり抵

抗感を持たれると思う。実験条件の効果の差から出てくる、幼児への影響をおそれる方が多いのではなからうか。それとも、幼児を実験に供することが非人道的と考えられているのだろうか。私にはもはやそんな人は保育にたずさわる方の中にはいらっしやらないと思うが、そういう幼児に対する配慮が、生態学的研究だけにとどめられていることは、逆に、幼児の将来を暗くするのではなからうか。

特に、遊びという幼児の生活そのものであるものを、実験的に研究することのむつかしさを感じるので余計に、遊びのメカニズムを冷やかに見てやろうと力むのである。

学会を終えてニューオーリンズの空港で、サットンミスと別れる時、彼が私に言ったことは、「おい、保、遊びは心理的行動だから心理学が研究する意味があるのだ。特に、子どもの遊びを我々大人が、子どもらしいと感じるのはどんな点かと、心理学的論理で説明することは大切なことだ」ということだった。

私は、彼のこのような意味のことを頭におきながら、帰国後にこの研究に着手したのだが、今から考えると、意気こみだけの龍頭蛇尾の研究になっていると、ひやっとするのである。

(広島大学)

。次号より受賞論文を連載します。